

「前事不忘、後事之師」 岡山・平和訪中団に参加して

崎本敏子

1) はじめに

日本国内で、中国残留孤児の国賠補償や強制連行の賠償責任が裁判で争われている。来年は戦後 60 年。「終わらない戦争」の実態を直視しなければならない。

今回の訪中は、玉野日比精錬所へ強制連行（別紙 1）された当事者とお会いして、その体験を聴く旅である。ぜひ玉野の人を、ぜひ若者と声をかけた。結果、16 人での訪中となった。日程は別紙 2 のとおりである。

2) 「前事不忘、後事之師」

南京虐殺記念館ではこの言葉をくりかえし聴いた。「前の経験を忘れないで、後の教訓とする」という意味である。

訪れた日は、2004 年 8 月 6 日。広島原爆の日。日本では核兵器廃絶を願う平和世界大会が開かれている。私は、日本の加害責任を直視するために南京虐殺記念館にいる。

思いをこめて手をあわせ祈らずにいらなかった。広島では 20 万人の人が 1 発の原子爆弾で死んだが、南京では、中国で 30 万人(日本の研究者は 20 万余)が人の手で殺された。日本人の手で 。

子どもも女性も高齢者も 無差別に。しかも、女性が強姦され、殺された。出発前に読んだ「南京・閉ざされた記憶」展図録集は、嘔気をもよおすほどに、無残な状況が書かれていた。現地に立ってみると、日本の右翼の根拠なき批判は許されないと考えた。事実の前には、人はやはり誠実でなくてはならない。法医学的検証や発掘現場の保存は意味が深いと思った（写真 1、3）。科学的な資料の残し方が意識されていると思った。朱館長の説明は理解しやすい的確だった（写真 2）。

「私は広島、長崎の世界大会に参加したが、広島、長崎の館長はここに来ていない。日本人は心がせまいのではないか」



写真 1



写真 3

の指摘や、事実をお互いに認めあう教科書の作成、東アジア共同体の展望などの話に共感できた。

倪さん（虐殺の生き残りの人）の証言をききながら（写真4）、心の中でいくつものハードルをのりこえて、こうして証言できるようになったのだろうと旨に涙がこみあげた。「日本政府は戦争責任を認めてほしい。日本はドイツとは全くちがっている。認めないから交流がうまくいかない。金額の問題でなくて、人道上の問題として解決すべきだ」の言葉が心に残った。

隣国である中国と心から手をつなぎたい。歴史の事実認識を一致させてわだかまりを解かして、一緒に未来志向になる日をつくりたい。

帰国して「小泉首相、来年も靖国神社訪問」「8月15日に、4人の閣僚が靖国神社公式参拝」のニュースをきき、ため息が出た。

「前事不忘、後事之師」の言葉を忘れず、憲法9条を生かしたい。



3) 何(か)さんの迫力の訴えは忘れない

岡山・玉野の日比精錬所へ強制連行された生存者2人と、遺族との交流会は進行役の責任を感じつつ、その時をむかえた。

楚方利さん（写真6）は、84歳の元気な姿でほっとした。しかし、妻は癌で入院中の由、お会いできず残念だった。早期回復を祈ってみんなで折った鶴を渡した。



会場に入ってきた何さん（写真7）を見た時、「怒っている」と感じた。厳しい表情だった。手に新聞をもっている。私にむかって一生懸命話しかけ、線をひいたその新聞につい

て何か伝えようとした。通訳の曹さんと呼んで通訳してもらうと、「日本企業がテーマパークをこの近くにつくろうとしている。これに国が関与しているなら賠償を求めにいきたい」と訴えられた。そうか、そんな思いをもっておられるのか——と緊張した。そして、もうひとつ。何さんは回教徒で「他人との会食



をしない」戒律を守る人だった。場所がレストランだったので、しきりに手を横に振って「ここでは食事できない」を伝えてくれたのだった。

交流会の時、何さんは「長くなっていいか」と私に聞いた。私は意を決して「いいですよ」と答えた。そして、約 20 分近く何さんは話してくれた。連行の時の状況、そして、今、日本人に伝えたいことを。「できることなら賠償してほしい。三井はなぜそれをしないのか、理由をきいて我々におしえてほしい」の言葉を忘れないで努力したい。

交流会の最後にははじめて笑って、握手してくれた。何さんのあの迫力で伝えてくれたことを私はしっかり受けとめたい。せめて、逃げないで受けとめたい、と思った。

進行役をしていたのでほとんどメモがとれなかった。

4) 中国の「今」を見て

上海、南京、北京は大都会。ドイツ合併のリニア・モーターカー、フランス合併の駅舎。TOYOTA、NEC、HONDA、そして竹中工務店の文字看板。日本経済は、たしかに中国でささえられていると実感した。

北京の変化はすさまじいもので、2008 年オリンピックまでに高速道路網をはじめ新幹線、地下鉄など公共交通網が完備されるのだと思う。高度成長期の日本のようなだった。

大都会の光と影もくっきりしている。貧富格差の拡大は歴然としている。

ホテルの前の公園でタオルさえかけずに毎日眠っている 4 人家族、若者。夜の街を歩けば女性が日本人男性に声をかけてくるという。一流企業で働けば月 30 万。一方、農家は年 4000 円の低収入。都会と田舎の格差も拡大している。

市場経済のもとで、この巨大な国はこれから環境問題、教育問題、食糧問題などにとりくむことになる。官僚主義と政治の腐敗を無くして、どのように舵とりしていくのか注目したいと思った。

(おわりに)

とにかく中国は隣の国。近い！ 経済力をつけてきて日本と方をならべたとき、人間とし

てせめて、嘘をいいあいたくない。対等に誠実につきあうために歴史の事実は知る努力を惜しんではない。

今とりわけ、日本の私たちはその努力をしなければならない。知ったら「本当のこと」を知らない人に伝える努力をしよう。

今回３度目の旅をご一緒した大森先生から「しっかり見る」ことの大切さを教えられた。本質を見据える目をしっかりみがきたいと思った。心の目も忘れずに。

石原君の体重 7 kg 減の「苦業」は大変だったと思うが、若者が同行してくれたことには心から感謝している。今度は仲間をつれていこうね！ と声をかけたい。

今回も訪中してよかったと思っている。

追伸

9 月には報告会が予定されている。ぜひ大勢の方においでいただきたい。日程は後日おしらせします。（そうそう、旅行費用はもちろん自費でした。）